

TOP > 論文・レポート > 子ども未来紀行～学際的な研究・レポート・エッセイ～ > 【一人一人の違いに寄り添うために】第9回 大人では届かないところに、子どもの手は届く

いいね! 12

ポスト

B!



論文・レポート

Essay · Report

【一人一人の違いに寄り添うために】第9回 大人では届かないところに、子どもの手は届く

著者： 袁手 章吾 (HILLOCK 初等中等部 学院長)

掲載日： 2024年8月2日掲載

カテゴリー： 一人一人の違いに寄り添うために 子ども未来紀行～学際的な研究・レポート・エッセイ～

関連キーワード： インクルーシブ教育, 日本, 袁手 章吾

English

ヒロックは「自由」のもつ価値を、心の底から信じているスクールです。自由であることは成長への動機であり想像力の源、豊かさへの可能性。そして何より、自由であること自体が幸せそのもの。実践をする中で、数えきれないくらいの多くの確証が、日々子どもたちの姿や生み出す文化から得られています。

とはいえ、大人が子どもたちに対して「さあ、自由にしていんだよ」と言ったからと言って、それで子どもたちは自由になれるかという、そんなに簡単なものではありません。子どもたちはこれまでの経験や学習から、空気も読めば大人の顔色もうかがうし、忖度^{そんたく}だってします。評価されたい、怒られたくない、失敗したくない、理想的な自分でありたい...その理由は子どもによって様々ですが、ほとんど全ての子が「すぐには自由に振る舞えない」という現実を目の当たりにします。

それでは一体、どのようにして「自由な場」は実現できるのでしょうか。

例えば「比較しない・されない場」。人と比べられたり、ましてや優劣をつけられるような環境では、誰しも隣同士で牽制^{けんせい}し合っ^あてしまい、自由にはなれなさそうです。「比べなくていいよ」なんて言葉で伝えたとこで、実際そこに比べやすい環境や、一元的に優劣を測定するようなシステムがあつては、自分と他人を比べずにはいられないものです。あらゆるものが違って比べようがない環境、すべての方向への拡張を「いいね!」と言い合える文化を醸成する。そこまでしてようやく「比較しない・されない場」が徐々に形作られていきます。

あるいは「マジョリティによる一側面だけで優劣を決められない場」も大事です。「こうするべき」や「これが普通」「みんなこうしてきたから」というのは、明文化されていないからこそ、余計に行動を縛るものにもなります。我々大人や社会の方が、無意識に縛られているのが厄介なところ。これまでの幼少期からの環境や文化の中で身に付いてきた先入観や偏見は、脊髄反射のレベルで染みついてしまっています。それが一側面的な見方にすぎないことすら、気付かないほどに。まさしくそこに、子どもを中心とした学びの場を開くことの難しさがあると日々感じるのです。

その難しさをひも解き、乗り越えるトリガーこそ「子ども」という存在だと、ひしひしと感じてきました。今回は、ヒロックで実際にあった一例をご紹介します。

キーワード検索

Google 提供



Find us on facebook

インクルーシブ教育



社会情動的スキル



遊び



メディア



発達障害とは?



CRN アジア子ども学 研究ネットワーク



CRNAの研究活動

Research Activities at CRNA



所長ブログ
Director's Blog

それは開校して間もない頃、子どもたちも少しずつ、新たな学びの場にも慣れてきていた時のことです。帰りのサークルタイム（みんなで輪になって、1日の振り返りなどをラフに話し合うような活動です）の時間に、一人の女の子が突然逆立ちを始めました。子どもたちは皆、予想もなかった友達の動きにきょとんとした表情。もちろん、私たち大人にとっても予想外の動きでした。

こんな状況で、これをお読みの皆さんならどうしますか。「ちゃんと座りなさい」「何やっているの?」「どうしたの?」など、声をかけたくなるのではないのでしょうか。私も声をかけたくくなりました。

しかし、声をかけようとしたその瞬間、ふと他の子の様子が気になったのです。笑い出すでもなく、注意するでもなく、今までのおしゃべりがずっと静まり返ったスクール。周りの子どもたちは、あからさまに顔色をうかがってはきませんが、明らかに「大人がどう声をかけるか」を気にしているように感じられました。「ああ、やっちゃった」「きっと注意されるに違いない」「どれくらいひどい目で怒られるんだろう」...これまでの経験などと照らし合わせ、そんな風に構えていたのかもしれない。

そこで私は、あえて声をかけることをやめ、気にせず談笑を続けることにしました。周りの子どもたちは意外な展開に驚いた表情。一人の子がおずおずと「...ねえ、逆立ちしてるけど、いいの?」と聞いてきました。私は「誰も迷惑になってないならいいんじゃない? 私はかまわないよ。でも、嫌な気持ちになったら遠慮なく言っていいからね。それも君の自由だから」と返しました。逆立ちしていた女の子は、びっくりしたような顔をして、そしてゆっくりと座り直しました。こういうとき、子どもは大人の言葉をよく聞いているんですね。

それがきっかけになったかは分かりませんが、ヒロックの子どもたちは一層自由闊達に、伸び伸びと生活するようになりました。そのようなスクール全体の変化を見て、改めてその日のことが思い起こされたのです。ああ、この自由は、あの子が作ってくれたんだよなあと。

突拍子もないことをする子は、規律を求められるような集団の中では疎まれがちです。しかし、そんな子が、得てして集団全体に自由をもたらしてくれるということを、私はまさにその子から教わりました。あの時、彼女が逆立ちをしてくれなかったら、大人がいくら「自由にしていんだよ」と言ったとしても、こんなにスムーズに自由な雰囲気はもたらされなかったでしょう。もし逆立ちをした彼女に対し、私が注意をしてしまっていたら「ヒロックも大人が上で子どもが下」という認識を子どもたちにもたせてしまっていたかもしれません。彼女がいたお陰で、ヒロックは自由な場になれたんだなあ。「これこそ子どもの力、大人にはかなわない力だよなあ」と感じさせられる一場面でした。

ここで私が言いたいのは「声をかけないことが正解、声をかけるのは間違った手法だ」ということではありません。子どもの育ちや学びに関わる大人は、「こうすべき」や「これが定石」という考えを一旦脇に置いて、一人の発達途上の学び手として身を置いてみる。子どもたちとの相互作用の中で、自分のもっている認識の枠に^{たいごみ}気付き、より「ありたい自分」に向かって共に成長させてもらう。そこにこそ、教育に携わる醍醐味があると思っています。

[<< 前の記事へ](#) | [次の記事へ >>](#)

筆者プロフィール



藁手 章吾 (みのて・しょうご)

HILLOCK (ヒロック) 初等中等部 学院長。元公立小学校教員で、教員歴は14年。教鞭を持つ傍ら大学院にも通い、人間発達プログラムで修士修了。

プログラミング教育で全国的に有名な前原小学校では、研究主任やICT主任を歴任。2022年4月、オルタナティブスクール・HILLOCK (ヒロック) 初等部を開校。著書に『子どもが自ら学び出す! 自由進度学習のはじめかた』『個別最適な学びを実現するICTの使い方』(ともに学陽書房)、共著に『知的障害特別支援学校のICTを活用した授業づくり』(ジアース教育新社)、『before&afterでわかる! 研究主任の仕事アップデート』(明治図書出版) などがある。

ご意見・ご質問

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

[ご意見・ご質問はこちら](#)

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購入しませんか? 子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

[登録・変更はこちら](#)

いいね! 12

ポスト



この記事の関連記事

- ➡ 子どもはなぜ明るいのか？
- ➡ 【実録・フィンランドでの子育て】 第16回 フィンランドのインクルーシブ教育 (4)
- ➡ 【インクルーシブな社会の実現を目指して】アートが実現するインクルーシブな世界Ⅰ～本人の望まない、違う誰かにしたくない～

論文・レポート新着記事

- ➡ 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11：若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ
- ➡ 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～
- ➡ 【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ (ベルリン)
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More

